「ニホン英語」（*Open Japanese*）の類型化研究（13）
―柳宗悦の民藝学と「ニホン英語」の原点

末　延　岑　生

はじめに

日本では長かった鎖国令が解かれて間もないころ、人々の間では陶芸の製作や鑑賞が盛んであった。中でも上流階級の人たちが扱う「銘品」とされてきた茶器など器物の多くは、日常生活で使われる「雑器」とははっきりと区別され､高貴な芸術品として扱われていた。その根拠は、一方が世間で名の知られた芸術作家といわれる人たちの、美の極致とされる様々な伝統的な先達の技巧を取り込み、さすがに「芸術品」だとうなずかせる高貴さを秘めた銘品と呼ばれるもので、芸術作品として珍重され高価な価格で売買されていた。

他方、名もなき工人たちが毎日汗水を流しながら、質素な条件の元で作られる茶器や雑器と呼ばれていた日用の食器類のいくつかが、ある時、心眼、直観を通じて芸術界をゆるがせ、その価値を逆転させるかのような改革を起こした美術家がいた。柳宗悦（やなぎむねよし 1899-1961）である。

柳はある時、名もなく平凡な工人と呼ばれる人たちの製作した、日常に使われる素朴な雑器の中に、当時の名工たちの制作する銘品に勝るも劣らない芸術作品としての、極まりない美しさを持つ作品を次々と発見・発掘、それに加えて他の数々の道具・装具等をも作品として世間に広めた。彼はそれらの素朴な作品の中に潜む美しさの原点となっているいくつかの要因・由来を見出し、それを民衆的工芸、略して「民藝」と名付け、生涯をかけてその啓蒙につくした。そして今や民藝学の土台を築きあげた *mingei* の創始者として、世界に誇る日本の美術家であり、美術鑑定家・美術啓蒙家として知られている。日本・韓国をはじめ、アジア諸国、欧米と、世界の人々の心を魅了した「民藝」と呼ばれるこの芸術用語は、彼の代名詞ともいえるものである。

以来、ちょうど一世紀が過ぎ、いまその再評価の気運が高まっている。この時期に柳の民藝学研究と、筆者の従事してきた言語教育学研究、中でも「無形の民藝」ともいえることばの方言、なかでも特に国際的に使われる異種英語としての「ニホン英語」との関連性について、ここに書き留めておくことは意義あるものと考える。

Ⅰ.「民藝」

ある時、柳がめぐりあった銘作、それは遠くフランスのロダンやルノワール、モネのような天才の美ではなく、朝鮮のある若者が持参した小さな李朝の染付の壺であった。誰がこんな美しいものを作ったのか。まったく新しい美に触れた思いがしたという。それが名も無き朝鮮の人々が作りあげた美であるとわかったとき、柳はその美しさに引き寄せられただけでなく、以来、隣国の朝鮮民族を想い愛するようになったという。その後朝鮮を度々訪問した柳は、そこで見事な工芸品に次々と遭遇することになる。

1.「民藝」とは何か

まず柳宗悦の代表的な著書『民藝とは何か』から、彼の主張のいくつかをのぞいてみる。柳によると、「民藝」とは「民衆が日々用いる工藝品との義（柳 p.21）」とあり、それは民器、あるいは俗に雑器、雑具、下手（げて）とも呼ばれ、その品質は一見、一般民衆が日々使う品物の内の、並の類ではあるが、それだけに最も深く人間の生活に交わる領域に位置する工藝品でもあるという。そこから派生して、ふだん使い、誰もが日々使うもの、毎日の衣食住に直接必要な実用品を代表して、「民藝品」と呼ぶ。

その使用者のほとんどは富豪や貴族の生活には縁がなく、一般民衆の生活に密着した民器であるから、柳はのちにそれらを拡大解釈し、そこに住まう民家、飾る民画、民器などを総称して「民藝」と呼んだ。一般にこうしたものは粗末なものという先入観が誰にもあり、時には、粗悪だと軽蔑侮蔑される。このため民藝品は工芸士の中で正当な位置を保つことができなかったと柳はいう。

さて本稿で筆者が日本の伝統的文化財としての「民藝」と対比し、日本人が伝統的に世界に向けて発信し、使用し続けてきた日本人古来の「ニホン英語（末延 2017 pp.110-6）」は、別名、「日本人英語」、「イングリック」などと呼ばれてきたが、他方、外国のそれは「インド英語」、「ベトナム英語」、「フランス英語」など片仮名で書かれ、呼ばれてきたことから、その伝統に合わせるべく、筆者はすでに 1990 年代から文字通り「ニホン英語」と呼んできたので、本稿でもこの用語を使用することとする。

ところが実は日本人のほとんどは、ごく当り前のように日本で長い時間をかけて、じっくりと醸造され産み出されてきた「ニホン英語」を学び、多くの日本人教師もそれを教えてきたと誰もが思ってきたにも拘らず、不思議なことにこの国では、実は「ニホン英語」は認められるどころか、戦後、排除の対象とされて今に至っている。ことばというのはそれ自体が元来無形な上に抽象的なものとはいえ、誰もが使っている「ニホン英語」がなぜ嫌われるのか。

英米文化の中で生まれ育った「英米英語」を、そのまま標準英語だと信じて学び、研究し、その文法形式を厳密に守りながら厳しく教えることに情熱を燃やす人たち。少しでも間違うと罰点を与える言語学者や教師のもとで、そのような「英米英語」と闘いながら、たいていはその厳しさによって、英語の学習から離れてゆく数知れない学習者たちの姿を見るにつけ、それを改革できない一英語教師の無能さにあえいできた。

長い歴史を携え、優和で品があると称賛されてきた日本文化のなかで自然に育ってきた母語と「英米英語」の良さを、程よく仲良く混ぜ合わせて生まれた「ニホン英語」、これをどうして恥じるべきもの、忌むべきものとするのか。そしてまるで地雷のような試験問題と向かわせられる受験生。

本当は異常な筈のことを、わざわざ説明するまでもないほどに異常なこと、これを理論的に説明することほど難しいことはないのだが、こういうどうしようもないこの現状を諦めかかっていた。そんな時巡り合ったのが柳宗悦の主著『民藝とは何か』である。ざっと目を通して見よう。

（1）温室の花をのみ美しい花とみる

柳は著書の第一節からいきなり、

「(一)、民藝品の美しさがほとんど全く認められていない。」という。その理由は、「一般の美への見方が因習的であって創造がありません」からであり、「温室の花をのみ美しい花とみる時、人々はしばしば野の花の美しさを忘れました（以上柳 pp.26-7)。」と。

芸術としての民藝はその用途もさることながら、人間の心を安らかにするという意味でも、美は重要な意味を持つ。

もう一つ、柳は「美への見方が因習的」であるという。美もことばも本来人間の住める社会環境の中なら、どこでも育つものであり、ことばはペンよりも強いのだから、わざわざ人工的にしつらえた温室などで育つような、ひ弱なものではない。ただし発話に制限を加えたり、自国の英語を下げずませたり、そのためによもや政府が禁止するような社会では、決して育たない。

言語をもし無形の民藝とするなら、柳の「温室の花」とは、実際には値段だけが非常に高いだけで、使用に耐えない「幻の標準語」つまり「英米英語」と捉え、一方、「野の花」とは植木鉢に植えられた鑑賞用の花々とは違って、柳が最も愛好する質素で素朴でありながら、生命力のある野に咲く花であるが、世間ではその多くが卑下され雑草と呼ばれる。これは世界中の言語の生の言葉・方言を象徴していると捉えることができよう。

（2）「用い得ないことにおいて、美もまた死んでくる」

さらに柳の著書の第二節では、「二.…今日の工芸史を見ると多くの讃辞につつまれながら、高い位置を得ているのは、大概は貴族的な品物なのです。…これに反し、民藝品の大部分には、ほとんど市価らしいものさえ未だないのです。」と。しかし上等な品のうちにも、「特に初期に属する単純なものに卓越したもの」もないではないが、「意識の超過や作為の誤謬に陥っていないものは稀の稀」であり、大部分が用途には堪えないし、「用い得ないことにおいて、美もまた死んでくる（以上柳 pp.28-9）」という。

さて、柳のいう「用い得ないことにおいて、美もまた死んでくる」というのはぶっそうな表現だが、その「用い得ない」の主語は銘器といわれる高価な美術品で、世間では主に飾るために作られているため、実際の茶器としての使用には堪え切れない代物だというのである。

これを「英米英語」だと例えると、用い得ないというより、むしろ文法も発音も英米人の真似を強いられれば、教室でも自然と誰もしゃべろうとしなくなるのは当然のこととなる。さらに長い伝統を擁する英米文化の詰まった「英米英語」という名の「ネイティブ英語」は、思春期の中高生にとっては、恥ずかしさもさることながら、あのスピードでは聴けないし、大げさな発音やしぐさまでを真似させられるという屈辱に、気分が悪くなるという生徒も少なくない。かくて自分の発話しやすいはずの、質素で簡単な「ニホン英語」も、通じないからと慎まねばならないことでは、死に体となるのも当然であろう。

（3）「人々は器を見ずに、名を見、技巧を見ている」

次に柳のいう「人々は器を見ずに、名を見、技巧を見ている」は教える側の人たちが「ニホン英語」を評価する前に「ネイティブ英語」のかっこよさや技巧に神経を尖らすことと受け取れる。さらに「初代の茶人達が愛した茶器は実に素直な物のみ」であったというが、技巧や個人の歴史が直ちに美の歴史ではなく、いまや「人々は器を見ずに、名を見、技巧を見ているのです。もし銘をけずり取ったら、いかに多くのものが彼等の讃辞からはなれるでしょう。人々の見方には充分な直観の基礎がないのです（柳 p.29）。」と手厳しい。

この「人々の見方には十分な直観の基礎がない」という厳しい主張は、芸術評価の出発点、最も重要な観点、つまり、直観そのものが間違っていると解釈されよう。しかし、柳がこれほどに尊ぶ「直観」とは何か。せめて直観でなく「直感」というのなら筆者でも少しは理解できる。筆者は最初にこれを読んだとき、正直まるで迷路にはまり込んだような思いに打たれ、これをもとに論文にするには難解すぎると直感し（ブレイクを読むまでは）、しばらく筆を置くしかなかった。

しかし、「ニホン英語」の立場からこの文を言えば、「見方」というのは「ニホン英語」

の意義とみると、それをどのように解釈するか。大方の英語を教える側は、それをネイティブ英語と比べて間違った発音と文法だと決めつけており、それを撲滅するのが教師の第一の役目だと勘違いしている。今までなされてきた数々の実験研究（末延 2002）を伴って指摘されてきた結論さえ信頼されない「英米英語」教育においてのこの因習は、日本ではまだ当分抜けきれないようだ。

では、ここで銘品と呼ばれてきた工芸品と、粗末・粗悪だとされてきた雑器との両者の区別についてまとめるにあたって、具体的な観点から抽象的なそれへと進めてゆく。まず、民藝の作者は日常、作品を実際に使う民衆の生活と直接交わっている無名の職人・工人たちである。他方、貴重品として崇められてきた工芸品の作者は、作品の買い手として多くの富豪の客を持ち、在銘を持つ美術作家であり、名工であり、富貴の生活に入り込んで、尊敬を受けている。

さらに比較してみよう。銘器といわれる作品の所有者・鑑賞者の多くは貴族・富者である一方、雑器の使い手は一般の民衆である。また、雑器は俗に高貴と呼ばれる上手物（じょうてもの）であるのに対して、下手物（げてもの）と呼ばれ、その価格には雲泥の差がある。では、制作する材質はどうか。高価で貴重、珍しい材料を精製したものに対して技は精緻を誇り、丹念、複雑、絢爛。その使途は飾り物としてか、実用としてか。制作の組織は多くは飾り物として官や富者に保護されている。このようにすべての面で、貴族的に対して民本的、協団的、個人的である。

では、雑器の制作者はどんな世界にいるか。ざっと羅列しても、一方では生活から遊離した生き方、特殊な世界に活きるのに対して、彼らは生活と直接関係がある通常の世界に住み、身分相応な質素な生活を営む。思想といえば、一方は有想に生まれる山の仙人、対するは無想に発する里の仙人である。

（4）ガラスの中の高貴な茶器

柳は臨済宗の大慧宗杲（だいえ そうこう 1089-1163）が、禅が文字に堕した時、憤って『碧巌録』を焼き棄てたという故事を用いて、「…茶器だから美しいのではないのです。美しいから茶器になり得たのです（柳 p.44）。」とたしなめる。「美しいから茶器になり得た」ということは、人がその美しさに魅かれて茶器として使うに至ったが、一方、ガラスの中に飾られた高貴な茶器は、茶器にまだなり得ていない代物ということになるだろう。つまり人が使ってこそ茶器であるということになる。だからこそ次に続く文は「茶器でないために、他の茶器を見忘れる如きは、見方に力がないしるしなのです (柳 p.44)。」となる。つまり茶器とは呼べない床の間に飾られたような茶器ばかりを見ていては、鑑定人たちには本当の民藝の茶器の秘めた力量を観る眼力を持てるはずがないというのだ。

このたとえは筆者にはガラスの箱の見世物としての言語が想像される。これはまさに言語の研究対象を、標準語や特定のネイティブ言語など、まるで「標準英語」であるかのように言語学分野のなかに鎮座させてきた歴史であり、現今も続いている姿である。こうした実態のない「幻の言語」が高い地位を占めてきたために、方言学や異種英語が入り込む余地もなく、最近に至るまで彼ら方言学者たちが長期にわたって日の目を見ずに来た元凶である。（眼力がなく未熟であったといえばそれまでだが、）言語の表面的な形式主義の中に埋もれ、そこから未だに抜け出せないでいる、近代から現代言語学にわたる「幻の言語」の残酷な歴史を思い浮かべずにはおれない。

（5）無駄をはぶいた簡素さ

さて、筆者は「直観」とは何かという大きな課題を残しながらではあったが、次に柳の第４節では、いわゆる上等品の中、彼が実際に直観した美しい作品を取り上げ、「四．いわゆる上等品の中、美しい作を取り上げてみましょう。何がそれを美しくさせているかを省み、…実にそれらの美しいものに限って、その所産心が全く民藝品と同じ基礎に立っているのを発見します。無駄をはぶいた簡素、作為に傷つかない自然さ、簡単な工程、またはそこにみられる無心の豊かな模様、堅実な確かな形、落ち着いた深みある色、全体を包む単純の美、それは民藝品を美しくさせているその同じ原理が働いているから（柳 pp.32-3）」ではないかと問う。そして柳は発見する。それらは「貴族的なものでは古い時代のものにいいものが多い」ことと、その理由は当時は「まだ技巧が進んでおらず、稚拙な味いがあるから（以上柳 p.44）」だという。（以降、「直観」についての考察は別に章を設けて詳述する。）

「ニホン英語」は当然ながら日本語の発音はもとより冠詞や複数のｓなど符牒のような文法規則を見落としたり不用意に付加したりするのをいちいち注意する代わりに、むしろ簡潔に、そしてゆっくり、活字体の様に丁寧に発話する子らの「ニホン英語」の伝達率・理解率のすごさ（後述する）を激励することである。たとえば13もある英語の母音は、よほどのことがない限り、前後の文脈から日本語の５母音の範囲内で代用できるものなのである（末延 2002、2015 pp.139-45）。だから実証もされていない「『ニホン英語』は通じない」という英語クラスでの常套用語を使って純粋な「英米英語」を守ることに熱意を燃やす人々のプロパガンダは一種の脅し文句であり、むしろ世界で最も通じやすい言語の一つであるにもかかわらず、日本の英語教育が最も通じにくいというプロパガンダに加えて、さらなる通じにくい「英米英語」をという二重の強要をしてきた（末延 2017 pp.63-73）ことになる。

（6）茶器として最初から銘器を意識して作る

そこで柳は「茶器として最初から銘器を意識してそれに沿わせるように作られた品物には、ほとんど茶器としての美を見る場合がないのです。あの茶道の初期におけると同じように、私たちは来るべき真の茶器を、茶器ならざるもののなかから見出しましょう。」そうすれば「私たちは何の困難なく「大名物」（筆者注：真の「銘品」の意）の数を限りなく増やすことができるのです。私はこの福音を多くの人々に伝える悦ばしい任務を感じるのです（以上柳 pp.44-5）。」と結んでいる。これこそ彼の理想とする民藝の実現を謡う力強い声明の一つであろうと筆者は考える。意識して一つの銘器を造って箱にいれておくのもいいが、「ニホン英語」を恥じて黙り込んで落ち込んでいる多くの日本の学生たちにこそこれをもって勇気を与えたいものだ。

（7）茶室の美

柳はいう。「茶室の美も云わば『下手の美』です。…暗いとか、見すぼらしいとか云われる小さな田舎家こそ茶室の美の手本でした。あの暗いとか、みすぼらしいとか云われる家こそ、茶室の美の手本でした。…茶の美は清貧の美です。…それは茶料理とても同じなのです。その土地のもので季節の品を選ぶのが本筋なはずです。（柳 pp.40-1）」、と。

素朴な古い民家から始まった茶道は、それに合わせて落ち着いた調和に気を配ることこそ美しいのだから、その根本を忘れないようにと述べている。次に茶室の美を学習者の存在と考えたとき、彼らの美しい母語の中心が日本語であるということを忘れて、いきなり英米人の擦り切れた子音発音を押しつけるのではなく、彼らの周りの環境もそれにふさわしく、ありのままに丁寧に素直に教えたらいいものを、わざわざ西洋っぽくしたりしないほうがよいというふうに受けとめられる。「ニホン英語」の美しさは「英米英語」と日本語の良さが仲良く混ざり合った、日本人にしかできない貴重な言語であることを教授者側がまず認識する必要がある。

質素は同時に節約を意味し、日本人の古来からのわび、さびを連想させる。日本文化の環境で生まれたその文化にふさわしい「ニホン英語」にも質素、詫び・寂びがある。

（8）見方に力がないしるし

「…大名物が美しいのは茶器だから美しいのではないのです。美しいから茶器になり得ているのです。茶器でないために他の民器を見忘れる如きは、見方に力がないしるしなのです。…いかに多くの見棄てられた民藝品に、来るべき茶器が匿（かく）れているでしょう。私たちは何らの躊躇を感ずることなく、それらのものの随所に、茶器の美を発見することができるわけです。そうして茶器として最初から作られた品物には、ほとんど茶器と

しての美を見る場合がないのです（柳 pp.44-5）。」と手厳しく、禅問答のようである。

日本文化にふさわしいとはいえ、それを「英米英語」に合わせさせることに執着する言語観を持つ学校英語教育。また、言語学・言語教育の分野では、長い間にわたって英語は「英米英語」しかありえないという間違った因習によって、「ニホン英語」を不潔と見、切り捨てる雰囲気を養ってきた。

言語学者たちや教師の多くは「英米英語」だけが正しい英語だと信じているため、教師たちは「ニホン英語」の良さを見極める力がなく、生徒には日本人にふさわしい「ニホン英語」の才能があることをも見抜けないで見棄ててきた。筆者は講演会等で、学習者たちが間違った英語は、屑箱に捨てないで欲しい旨願ってきた。宝物なのである（末延 2013b pp.139-40）。

（9）形式に枯死する

柳は、茶器だから美があるのではなく、まして美が茶器に限られているのではないのにまったく形式化して、「茶」の精神を忘れ、ただ古い型のみを踏襲、「形式に枯死する今の茶道と、心において何の連絡があるでしょう（柳 p.42 より）。」と。教える側は日本文化、日本語には存在しない「英米英語」文法の異文化形式、たとえば、数量、時制の一致などの表現をこそ日本語と違って珍しい形式だと特別に強調してたえず押し付け、入試に出すなど完璧な概念形成教育を優先し、初歩の生徒が間違いを犯す当然の自由をさえ最初から摘み取り、「ニホン英語」を使うチャンスさえ失うことになる。

（10）「型」からの脱出

「また、「『型』とか『極め』とか『銘』とか、かかるものは美の本質的な標準とはなりません。…例えば「茶」に用いる鉢は何寸でなければならぬという如きは、あまりに不自由な考えです。それは茶室の大きさに準じて変えていいはずです。真の茶道には無限の形式と内容とに展開するものであっていいはずです。かかる自由さにこそ茶道の真の古格があると云えないでしょうか（柳 p.45）。」

「型からの脱出。」これは半世紀も前の柳宗悦（1899-1961）の提言である。たとえば TOEFL、TOEIC のような米語一点張りで、なかでも型を問う形式の設問の何と多いことか。まるで校正専門家の養成だ。その厳格さでは、何事にも決定権のない中高生個人に対してそのような制限のもとで点数をつけるということは、基本的に差別であり強制である。ネイティブ英語を聴かされる日本人とそれを話す英米人、またネイティブ英語を話したり書いたりするよう強制される日本人と、「ニホン英語」を英米人に通じない言葉とみなす人たちの狭間で、学習者たちは明治以来悩み通してきた（末延 2015）。

続いて「だが、真の復興は復古ではなく、発展でなければなりません。…時代が何を私たちに追加させたか。第一は茶器や茶室に対する考えの拡大なのです。彼らは規定する茶道に適する室や器のみを選びました。だが私達の視野は広げられています。美しき家や器に、約束せられた一定の法寸はなく形体はないのです…無数の茶器があり、無限の茶道があると云えないでしょうか。…私達は茶祖が見得ずして終わった無数の美しい民藝品を見る喜びを得ているのです（柳 pp.52-3）。」

ことばにも本来決まった形態はない。あるとすればことばは互いの思いを相手に伝わることが第一であることは論を待たない。しかし最近では少しは緩和されようとされているものの、所詮、入学試験等ではネイティブの英語が正しいと決められ、日本の若者たちは「英米英語」文法の形式的なルールの強制に悩まされてきた。

（11）因習的な鑑賞と歴史とが覆される

「因習的な鑑賞と歴史とが覆されるときは来るでしょう。そうして、かつて虐げられたものと讃えられたものとが、その位置を顛倒する時は近づいています。私は少しの躊躇もなく、かかる革命を安全に予言しましょう（柳 p.48）。」

言語教育の世界にとっても、力強く勇気づけられる声明であろう。文法、発音、イディオム、ことわざなど、否応なく英米の文化のなかの因習に従わされてきた日本の英語教育からの自由を謳う。

（12）「病に罹った贅沢品」

茶器について宗悦は、茶人は茶碗を眺めて「七つの見処（柳 p.39）」があると云います。そうまでに美しい個所を教えてくれた最初の人を私はあがめます。だが、もし作者が「七つの見処」を意識して作っていたら、その「見処」はたちまち消えていたでしょう。後代この「見処」に捕えられてわざわざできた茶器に一つとして美しいものがないのは無理はないのです。それはもう民藝品ではなくして、「病に罹った贅沢品になっているからです。「七つの見処」は見る方にあるので、作る方にあるのではない（柳 p.39）」からだという。

「七つの見処」を意識して器物の作品を造るのは、言語学習の世界でも、英語教育に例えるなら、「英米英語」の文法や発音にわざわざ意識させた上で発話を促すようなもので、まさに不幸な逆転の発想だ。ことばを学ばせるには文法を先に教えた方が簡便で、経済的だとして教えるのが敗戦後以来、特に最も日本的で計画的、理想的な発想だと想定されて現在に至っている。ことばは文法が先に生まれたのではないにもかかわらず、こうした逆転的な理屈に頼る指導法（‘神戸の港に船が着く、三単現に s が付く、’ や ‘be ＋動詞の原形に -ing’ と黒板に書いて書写させれば完了）を優先して学習者を苦しめてきたのと同

じである。その逆に、実践を全く伴わないで済むことから、指導者にとってはこれほど安直な指導法はない。語学の実践は本来、体育の教師と変わらないぐらいに身体を消耗するものなのである。

（13）初代の茶人は素直な物を

柳は「初代の茶人たちにどうして美への良い認識があったか。もとより彼らに鋭い直観があったことが、それを可能ならしめた基礎であるのは云うまでもないのです。ですが、同時に直観を充分に働かし得るような境地にいたからと説くこともできるのです。その大きな理由は、主に茶器が外国のものであるため、とりわけ新鮮な印象を受けたことに因るのです。…後代の茶人達が何故民藝の美を認めるに至らなかったか。彼らの見方が自由を失ったからです。認識は直観の基礎を失い、概念が代わってその位置を占めたからです。」と。さらに「初代の茶人たちが愛した茶器は実は素直な物のみ（以上柳 pp.49-50）」であったという。

このことはことばについても言える。英語の歴史を紐解くと、古代英語の時代では関係代名詞のような複雑な文（複文）は見られず、当時は短文、重文で十分に通じた大らかな時代であった。それは素朴とはいえ、現在でも十分に通じるのだが、悲しいことに複文ができない人には通じにくいのだ。発音の種類も限られ、一音一音がはっきりと発話され、リエゾン（連音削除）も気になるほどはなく、発話スピードも大らかで、余裕のある時代だった。未開拓であったからこそ、その素朴さがあったのだ。「ニホン英語」にはそのすべてが組み込まれているからこそ理解がしやすいのだが、現代人はスピード時代の世界にあって、こうした「ニホン英語」は洋を問わず邪魔物として時代に置いて行かれるのかもしれない。

言語の認識の場合も、筆者はまさに柳のいうように、「直観の基礎を失い、概念が代わってその位置を占めたから」だといいたいのである。筆者はこの場合の柳の民藝に対する本来抱いてきた概念とは、ソシュールのいう言語に対する見方、つまり「言語学の十全で同時に具体的な対象とは何か。…観点に先立って対象が存在するのではさらさらなくて、いわば観点が対象を作り出すのだ（F.de Saussure 1928）」という観点、つまり「直観」を指すと捉え、これが時代の経過とともに形式化してきたと解釈した（末延 2017 pp.95-7, pp.120-3）。

生を失った芸術（品）とはどんな悲惨なものだろうか。それが分からなくても、毎日使っていることばがその生を失った状態というのがどんなものだろうかは、少しはわかるような気がする。以上は、柳が著した『民藝学とは何か』における宗悦自身の生の言葉をできる限り取り入れて生かしながら、半世紀以上にわたって言語学に危惧を抱いてきた言語教

育者の一人として、「直観を失った現代言語学」の面から観た、「京阪神語」でいう“ほんまもん（本真物）”のことばを観る眼を求めて、筆者の拙い寸評を加えつつ「ニホン英語」の民藝学的解釈をまとめたものである。

Ⅱ．民藝と「ニホン英語」

１．「ニホン英語」との共通点

（１）「ニホン英語」の特徴

「ニホン英語」の特徴については本シリーズのなかで度々説明してきた（末延 2016 pp.25-33 ほか）のでここでは簡便に説明するが、民藝との共通点が多い。理由はともに日本文化の影響によるもので表現が簡素で、相手を思う丁寧な発音（筆者は「母音英語」と呼ぶ）にたいして、英米人はたとえば

My mother <u>and I</u> are at my father's <u>desk</u>.

の下線部分を‘アンダイ’と圧縮したり、語尾を閉鎖音にして‘デス’などと経済的に発音することが多いので、‘両親が死んだ’と聞き間違うことが非常に多い（末延 2015 pp.145-55。筆者は母音を省略しがちな英米英語を子音英語と呼ぶ）。子どもたちにとって元来、世の中に、ことばを学ぶことほど面白いことはない。知らず知らず少しずつ学んでゆくうちに、どんどんとことばの知識だけでなく、それがまるで雪だるまを転がすように増えてゆき、それを使って次々に新しい語句を推理しながら学べる楽しみ。これを文法や発音という魔法使いが怖がらせにやってきて、一網打尽に嫌いにさせてしまう可能性がある。できる子とできない子では一目瞭然、できない子は恐怖の学習になる。

「ニホン英語」（末延 2017 pp.110-6）もまさに大抵の日本の英語関係の学者たちをはじめ、現場の英語の先生方から、なぜ間違った英語を大事にするのかという素朴な疑問から、深刻な言語学・現代言語学への冒涜と見ているのだろうと問われてきた。社会言語学やそれよりはるかに古い歴史を誇る素朴な方言学の発想（末延 2020）は、私たち庶民が平時に何気なく使う平凡なことばのなかに、真の言語の魂を見つけたことと、本稿で学ぶ柳宗悦の民藝学と関連があると筆者は以前から直感的に考えてきた。

この点でも、両者すなわち「民藝」の研究と啓蒙に倣って、いわゆる方言ないしそれに相当する英語の日本人的用法、つまり本稿で取り上げる「ニホン英語」のそれは、宗悦の民藝学の原理とその道程を真摯に学ぶことによって、歴史的にも実際の応用においても、さらに研究を深めるための多くの示唆を与えてくれるだろうと考えた。

若き柳宗悦が、後に「民藝」と称せられる器の数々のなかに潜む、真の美しさに心を奪われたのは、むしろ名もない工人たちによって日々の生計のためにこつこつと無言で造り

上げられた、一見何の変哲もない雑器の類であった。これは自力作善の善人が仏に頼る気持が薄いが、凡夫（悪人）は仏の救済に頼るしかないとの気持が強いため、仏に救われる（欲もなくただ無心に作る雑器のなかに魂を見た）親鸞の「悪人（凡人）正幾説に通ずる。これこそ「ニホン英語」でも起っている現象であるというのが筆者の考えである。

彼は工人たちがその過程で無心にこつこつと作りあげる器そのものの中にこそ、人間の魂がこもっているということ、それを美術鑑定家としての彼の直観でもって見抜いたからであった。想像してほしい、英語を学ぶ日本中の中高大学生が、たとえ必修だとはいえ、授業中にあの数学の公式のような英文法の難解な展開図の説明を、なぜ拝聴し続けなければならないのか。

少なくとも現存するあらゆる学問領域の中で、その領域をより確固な存在として前進するためにも、言語を駆使しない学問分野はありえないといっていいだろう。中でもその存在と機能、およびその性格が、日常何気なく使う食器など民藝（学）と類似しており、そうした身近な方言や「ニホン英語」も文化遺産に類するものとして、その存在をそろそろ認めていいのではないかと思われる。

その両者はそれぞれ固有の言語であって、当然ながら、差別、偏見があってはならない。以上のことを提唱したい。（後述するがネイティブ英語の理解率と世間的な価値観を覆す「ニホン英語」のそれとの驚くべき違いを考えるがいい。）

その中で柳はむしろ人々の生活の中で使われる日用品の中にこそ、真の美が内在していることを示した。工人たちが庶民の用途のために心を込めて作り、その気持ちがわかる庶民たちが、ありがたく使用してきたその手のぬくもりにこそ美が存在し、その価値が認められるのではないか、と提唱、それが民藝へとつながってゆく。

宗悦のこの感覚と発見が前述のように、筆者はいわゆる標準とすべき英米のネイティブ英語に対して、ぬくもりのあると考えてきた「ニホン英語」と、相関性が見いだせないかと感じ、そこから言語と芸術という比較において、さまざまな顕著な類似性と同時に、逆に比類できないものがあるのではないかと考えた。それらを通じて「ニホン英語」の存在をより顕著に浮き彫りにすることができ、それが「ニホン英語」だけでなく民藝学の研究にも何らかの意義が発見できるものと信じている。本稿の目的はそれらを追求しようとするものである。民藝と「ニホン英語」の関係については第5、6章でも詳細する。

Ⅲ．柳の学問的基盤

１．柳宗悦の父、柳檜悦について

（１）父檜悦の影響

柳宗悦は 1885 年東京で生を受けた。海軍大将であった父柳檜悦は、宗悦が 2 歳の時に他界した。宗悦の生涯にわたる大仕事のきっかけとなった由緒を調べてゆくうちに、そこには彼が幼少時に亡くした父檜悦の影響が大いにあったことが明らかとなる。楢悦は 1832 年江戸に生まれ、宗悦は父からほとんど何かを学ぶというような期間があったわけでもない。ところが鶴見俊輔著『柳宗悦』によると、本書は宗悦自身の評伝でありながら、全体の三分の一近くが父檜悦について詳細に書かれている。これを読んでゆくと、いよよ“この父にしてこの宗悦あり”と、宗悦の全仕事との深い繋がりを発見するに至るからである。

鶴見によると、父檜悦は宗悦に関する知識がすでにある程度備わっている読者からすれば、まるで父の魂が宗悦に託されたかのような錯覚を覚える程に共通点が多く見られる（鶴見 pp.8-42）。そこで本稿では宗悦に先立って、まず父檜悦の業績から紹介する。

1870 年、日本政府は海軍を創立する計画を練っていたが、当時日本近海を航行する艦船や船舶が、頻繁に海難事故を起こし、それによって多額の国費が無駄になることで、兵部の長官は頭を悩ましていた。これについて問われた檜悦は、その原因が乗組員の航海・測量の術に不慣れであることを突き止め、進言した。そこで政府は早速に各艦船とその乗員を品川に集め、航海術・測量術・操帆術・操機術から海上算術等の諸技術を教育熟練させることを海軍創立の基本とすることとした。

（２）測量、数学の技術

その際に檜悦は、たとえば艦船の乗員たちがイギリス船に比べてはるかに劣った機械を使いながら大きな成果を上げたこと等で、創立初期の日本海軍に大きな自信を与えたことが記録されている（鶴見 p.15）。このように外国人を安易に雇うことなく、日本人自らが工夫を凝らして測量を成し遂げるという基本方策が、柳の当初から採用した海軍水路部の方針であり、指導理念であったという（鶴見 p.17）。中でも当時未だ儒学、朱子学の冷めやまない影響にありながら、その基礎となる日本独自の、関孝和をはじめとする「和算」の教養が、外国人たちに頼らない自主的活動を支えたという（鶴見 p.18）。まさに一石二鳥であった。

このように宗悦の誇るべき父柳檜悦を鶴見は「日本の和算を、西洋の数学に対してひけをとらぬ独自のものと考えていた。みずから和算を応用して測量し、実地の役に立てたそ

の経歴から見て、測量と航海に関する彼の自信には、相当の裏づけがあったと見てよい。その自信が数学の全体に当てはまるように考えたところに、彼を含めての和算出身の数学研究者のせまさがあったようである。三上義夫、小倉金之助ら後世の数学史家は、そのように柳檜悦を位置付けている（鶴見 p.20）。」と述べている。「だが、西洋の学問の輸入の時代に際会して、自分たちの問題のすべてを西洋の眼で見ようとするのでなく、日本の眼で、西洋の問題を見ることをも含めて世界の未来をつくってゆこうという態度は、後に彼の末男柳宗悦によって、数学とは異なる文化の領域でうけつがれた（以上鶴見 p.20）。」という。つまりこうした父檜悦の和算への少々行き過ぎたとも取れる自信こそが、その裏返しに後の宗悦が提唱する和洋「共生の道」への見事な教訓となって繋がっている。

こうして檜悦は、単にイギリスの、一見、一歩進んだ博学知識を単に写し取るだけのようなことを極力抑え、現状のままの日本のもてる力で研究を進めたと解釈できる。後述するが、宗悦が若き日から科学に興味を示し、美術をはじめとする人文系の世界にいながら、あくまで科学的に物事を立証せんとする意欲を呼び起こしてきたその原点といえば、以上のような父の影響が大いにあったと考える。

さらに鶴見は、西洋の学問の輸入の時代にして、自分たちの問題のすべてを、西洋人の目でなく日本人の目で西洋の問題を見ることをも含めて、世界の未来をつくってゆこうという柳檜悦の態度は、のちに宗悦によって、数学とは異なる芸術文化の領域で受け継がれた、と記している。

こうした数学の世界のなかで、日本の力を日本人の知恵と勇気で押し通した宗悦の父の業績を鑑みるとき、翻って後述する英語教育の世界は、以後一世紀を経てもなお、いまだに英米追従の様相を呈している（末延 1985, 2011, 2015）。ただ大英帝国や新世界米国の「英米英語」魂をそのまま、いやそれに輪をかけてその権威をなぜか我がものと間違え、自分たちを客観的に見ようとする余裕がほとんどなかったのである。

２．柳の学習院時代

（１）「白樺」の発行

さて、学習院中学部に入ると宗悦の周りでは、日露戦争で旅順を陥落させ、“もっとも誠実な軍人精神の体現者”と呼ばれた軍人乃木希典が学習院院長となり、若き宗悦等華族の子弟は「国家のために格別の献身をもってむくいるべき」という思想を啓蒙していたようである。

ところがやがて宗悦は中学生にしてこの乃木の「負の遺産」の存在を疑問視し、中学の最終学年の時、華族の子孫という道筋からの決別の一歩として、作文『吾が疑い』を書いている。これはまさに乃木に抗うかのごとくに、日露戦争の勝利に胡坐をかき、日本が世

界の大国の体裁を真似つつあった当時の気風に対して、人それぞれ、自分の生き方を考えるべきではないのかという“疑い”であった。

学習院高等部では、幸運にも、文学好きの若者たち、なかでも上級生の志賀直哉、武者小路実篤、芥川龍之介、里見弴など当時の錚々（そうそう）たる作家の卵たちが「白樺」という名の集まりのもとで、切磋琢磨していた。そこで発刊された文芸雑誌『白樺』では、彼らの20代の小説をはじめ、中でも西洋近代美術の論評を通じて、西洋の美術家たち、たとえばロダンやルノワールなどの論評など、西洋の美術を日本の各界に紹介した。その中で、特に美術編集を任されたのが若干十代の柳宗悦であった。

また、仏教美学に親しんだのもこの頃であり（鶴見 p.45）、さらに英米の作家ウイリアム・ブレイクやホイットマンに関する作品を通じて、英米文学、さらに宗教学、中でもキリスト教思想を紹介している。

（2）失意の大学時代

柳は1910年に東京帝国大学の哲学科に入学、心理学を専攻するが、当時の心裡学や哲学、芸術や宗教など科学から遠く離れた学問観に直観的に気付き、フランスの免疫学者で1908年にノーベル生理医学賞を受賞したメチニコフ（1845-1916）の科学的な実験と観察力と、それでいて人間性あふれる研究態度を学び、「メチニコフの科学的人生観」という論文を『白樺』に発表した。

さらに卒業論文でも、その題名が示すように「心理学は純粋科学たり得るか」と、専攻した心理学そのものに対する疑問を提議している。このように、大学での学問生活の経験を通じて、これから自分の目指す普遍的な学問上での科学面の重要さと、読み始めたブレイクの数々の詩編の影響と相まって、彼自身の内面の激しい感情から、後の「民藝学」の成立の前兆をここに窺い知ることができる。

（3）論文「哲学に於けるテムペラメントについて」

柳は1913年、論文「哲学に於けるテムペラメントについて」を発表した。テムペラメントとは気質・性質、広い意味で思想・行動を指すが、これは彼の若き日の学究生活の総仕上げといってもよく、彼の内から湧き出る感動や人間性の表れでもあり、既成事実に翻弄されることのない若さが書かせたものととらえることができる。日本の思想哲学という学問形態が、単に既成真理の集大成であったり、机上の論理性の研究に始まり、そのあくなき追及に終始する結果、その発見に終わることで良しとしていいものかを自問する。そこには個性の自由な発想の飽くなき展開こそが、その最大の課題でなくてはならないとする刺激的な論文である。

柳は中見によると、本来人間は自己責任において、ことばだけでなく一切の規制、権威から自由でなくてはならないと、自己のテムペラメントと合一していない理論は一つとして人を動かす力を産まない（中見 p.38）、と。さらに一切の哲学的確実性と権威とは、抑制することの出来ないテムペラメントの本然の叫びから湧き出ると述べている（中見 pp.38-9）が、これはブレイクの影響によるものと考えていいだろう。

また同じく中見によると、凡て芸術は学説より造られない…学説は決して生きた生命を産まないと、さらに真の芸術、哲学は必ずや人格から湧いて来なければそれは虚偽のものだとした（中見 pp.38-9）。

以上のようにして、柳はブレイクの作品を通じてそれらが自己の考え方と一にすることを確信、それはきたるべき柳の打ち立てることになる「民藝学」を彷彿とさせる。

Ⅳ．ブレイクの思想と民藝学

１．芸術研究者として

柳は東京帝国大学心理学科を卒業後、一旦は宗教学者への道を目指した。そこには英国の詩人・画家・刻版師で、神秘と想像の世界に生きるウイリアム・ブレイク（1757-1827）の世界があった。日本におけるブレイクの研究は、すでに 1894 年には坪内逍遥や上田敏などが彼の詩の翻訳書を出して紹介していた。また、東京帝大ではラフカディオ・ハーンがブレイクを講じ、和辻哲郎も『帝国文学』に論文を書いていたが、いずれもブレイク研究についてのネガティブな面が強調されているようであった。

柳にブレイクの思想を導いたのは白樺を中心とする先輩の作家たちで、中でも柳はイギリス人のバナード・リーチと親しくなり、ブレイクについて直接教えを受ける幸運を得た。このようにして柳の学問の方向性を決定的にさせたのは生涯の師ともいえるブレイクであった。当時、ブレイクとその作品と人物評は一見して、日本はおろか母国英国、広く西洋でさえも、野放図で無責任、荒っぽい異端者と見られており、情熱的とはいえ誰にも理解できないような詩を版画とともに出版し続けたが、その努力もほとんど報われないまま、寂しく生を終えたという。

ブレイクの諸作品を読むうちに、当時の帝国にはびこる不合理や矛盾など、特に身分・宗教をもとにした許せない差別…、このような因習に対して自分の信ずる理論をかざして立ち向かうブレイクの姿に、若い柳は惹かれてゆく。そのうちに、ブレイクには天才の力というよりも、さらに個々の人間の造作を越えた偉大な力がその根源にあるのではないかと考えたという（三村 pp.90-2）。

中でもブレイクの初期の作品『天国と地獄の結婚』では、あらゆる対立、たとえば天国

と地獄、精神と肉体、理性と情動、善と悪、男と女といったものが表裏一体となっており、それぞれが決して分離して存在することはありえないという思想で、そのことが大きな意味を持つと強調している（三村 p.91）。こうして柳は更なる高次での二元世界の合一を求めた。

また、ブレイクの 1800 年の後期の詩では、人間の想像力こそが神聖なものであり、永遠の世界「天」とは彼にとって、神の世界又は事物の根本実在を意味していたという。それは自然の奥底にひそむ真の生命、即ち物如の世界に外ならなかったと解した（尾久 p.91）。つまり、想像の世界とは対立する自我と自然、心と物とが、必然的に一つになったとき、そこに出現するのは純粋な実在の世界であり、それは神の世界だ。つまり、生きとし生けるもの、すべて神聖であり、人間の中にも神聖があり、その神聖の故に人と神とが本質的に同一であり、合一できると信じるということである。だが、「想像によって神人合一の世界が出現する、つまり至上のイエスと同等に喜びも過ちも想像して対話するブレイクの姿勢は当然、西洋では受け入れがたいものとしてぞんざいな扱いを受けた（尾久 p.91）。」という。

しかしキリストが「神人（しんじん）」と呼ばれていたように、東洋の仏教思想では、すでに 13 世紀には親鸞（1173-1262）の著した『歎異抄』の悪人正機説に見られるように、いったん改心すれば通常の人よりむしろ仏をより深く信じ頼り切る悪人と呼ばれる人たちの、その心根を仏が読み取り、善人も悪人もあまねく仏となれるという大乗仏教の思想の中にあって、若いころから仏教哲学に関心が深かった柳にとっては、ごく自然な形でブレイクの説く西洋のキリスト世界、哲学を改めて学ぶことができた。また、柳の思索は「『人性の能力の偉大』という白樺派の理念を、人性こそ神性であるとしたブレイクの世界にまで、自然に拡充することができた（尾久 pp.91-2, 末延 2004 pp.48-53）」のである。

２．ブレイクの思想と十全の神の理

ブレイクとの遭遇によって柳は「アカデミズムの学問観から脱却し、自分のテンペラメント（性格・性質）を反映させた学問をめざしてゆかねばならない…その対象が哲学と芸術の双方にかかわり、しかもその人格に傾倒し、思想に深く共鳴することのできる人物でなければならない…（中見 pp.39-40）。」と考えた。

その例として、ブレイクの「あらゆる『存在の肯定』はブレイクの道徳観の枢軸であった（中見 pp.45-6）。」。また、柳自身「我々がまず脱出すべきものは不自然な人為的律法でなければならない（中見 p.46）。」と。

（1）ブレイクの観点と「ニホン英語」

ブレイクの道徳観からすれば、これはあらゆる「存在の肯定」と、「不自然な人為的律法からの脱出」という意味から、当然「ニホン英語」の存在の肯定が成り立つことになる。これはむしろ正文対誤文といった対立を中心とする現代言語学の標準文法や、標準発音に固まった学問領域としての英語学からの脱却を示唆することにならないか（中見 p.151）。

筆者は、柳の傾倒するブレイクの対立から合一へと結びつく観点と、無律法的な観点から、自分たちに合わせて無理やり異文化の下で育った英米人の「ネイティブ英語」を、何の臆面もなく、日本の学生たちに強制することを良しとする人々に対立して、ことばは本来楽しかるべき自然から生まれた「ニホン英語」を受け入れさせる英語学者や英語教師たちとの間の言語観の違いを、どのようにとらえることができるかを筆者なりに試みてきた（末延 1986 ～）。

以上の様に、ブレイク研究の総体として、一言で言えば、筆者は中見が指摘するように、「一切の存在に対する肯定的性格、自己実現への積極的姿勢、個性的キリスト観、立法および抽象的なものの否定、理性・合理的体系・分析的知識への嫌悪、直観・想像への重視、制度自体よりも制度変革をもたらす個人の自発性の獲得を重視した政治観等、いずれも現在に至るブレイク研究がくり返し言及しているところ（中見 p.47）。」の、そうした対立項目を平和裏に合一させて解決する道を模索していった。

（2）十全の神の理

ブレイクの思想は、日本では天理教祖中山みきが唱えた「二つ一つ」の教えに通じるものである（末延 2004 pp.59-73）。二つまたは幾つかの事柄が、例えば「誠の心のような人間の精神」とか、または「親神の守護」によって一つに治まること、「両立し難いものでも両立し得る道があり、それが天の理すなわち親神の守護であるということ（末延 2004 pp.62-73）」とある。両者は相反するものではなくて、この二つが単に「両立」するということだけでなく、その違いを超越する、その境界を取り除くことによって、日常の生活を通じて「国々所々の手本雛形」になるための道筋があるのではないだろうか（天理大学おやさと研究所 1977 p.731 より）。

天理の教えでは全宇宙を支配する十柱の神が、言語面で次のような役目を担っていると仮定し、これを筆者は言語学・言語教育学の立場から、2004 年に次のような分類を行い作成した。それが次のような分類表である（末延 2004）。ことばを使うとき、人はそれを自覚して使っているかどうかは、それをどのように使うかは、その人の「心ひとつが我がのもの」であるから、世界では一語一句使用する個人の自由に任されているが、同時にすべての責任はその個人にあるというものだ。

（3）十全の神の守護—ことばの働き

天理の教えでは十全の神とは、宇宙を司る神をいう。限りない様々な働きのなかで人間のことばの働きについて、以下に十全の神の守護の働きを示す。ここでは「言語能力」を司る六台で 計三対の守護を説明するが、いずれもそれぞれ一対ごとの守護を示す。最初の対は、「言語の枠組みとその真意」を担う。

くにとこたちのみこと　世界では水の守護の理。理性、枠組み。

をもたりのみこと　世界では火の守護の理。言語ではことばの中身、心、真意、感情、感覚等。

次の対は、「言語の形式と意味」を担う。

いざなぎのみこと　男雛型・種の理。言語では単語等。

いざなみのみこと　女雛型・苗代の理。言語では意味等。

次の対は「言語の構成とその幹と枝」を担う。

月よみのみこと　世界では万つっぱりの理。言語ではその構造、音韻　文法システムの概念。縦の連合関係等。

くにさづちのみこと　世界では万つなぎの守護の理。言語では音素形態音素・超文節音素→形態素→語彙素→語句→節→文談話等。

次の二対では「言語の四台の守護」を説明する。これらはすべて「言語運用」を司ると考える。

はじめの対は「ことばの発生と文節」を担う。

かしこねのみこと　世界では風の守護の理。息吹き分け。呼吸器官を通じて酸素を新陳代謝。言語では呼吸と同時に発話するなど、実際面で最も土台となる。

たいしょくてんのみこと　世界では切ること一切の理。細胞増殖→細胞分裂→自己複製。言語では区切り。単語→文節→文への転換等。

次の対は「ことばの摂取と発達」を担う。

をふとのべのみこと　世界では引き出し一切の守護の理。言語では、心の思いをことばという形にして引き出す役目。肺から出された空気が、咽喉、口腔、鼻腔部などの調音点で分節され、それが音声となり、単語となり、それがより複雑になって文節、談話へと発展する。

くもよみのみこと　世界では飲み食い出入り、水気上げ下げ、栄養を消化･吸収。老廃物の排出、成長促進。言語では、耳、目を通じて外部から言語を吸収する。心のゆとりを持って聞く態度。融通

性。（末延 2004 pp.68-73）。

以上が人間の言語にかかわる十全の神々の守護である。今一度繰り返すが、ブレイクの思想は、“一切の存在に対する肯定的性格”という場合、これはすべての「天の理（末延 2004 pp.102-12, 天理大学おやさと研究所『天理教事典』1977 pp.543-4）」つまり、何が起こっても成ってくる事柄はすべて天の理として生じることであるから、すべて喜んで迎えようという意味であり、それが起こったことの良し悪しはともかく、起こってしまったことはすべて過去のでき事である。だから悪事でさえ起ったこと自体、認めざるを得ないという前に、起こったことを素直に反省できることを喜ぶように心がけなさい、というのである。このように考えれば筆者はブレイクの思想と天理のそれは共通する面があるのではないかと考えた。

しかもそうであればあるほど、ブレイクの詩の中味もさらに深く認め合う必要がある。しかし、前述した天の理の思想のひとつである「二つ一つの理（末延 2004 pp.75-84）」からすれば、両者が互いの「悪行・悪運があればそれを受け入れ、認めるだけでなく、さらにそれを互いに「喜ぶ」領域にいるという思想である。

それは、さらに繰り返すが、起こってしまったことを、いつまでも心のうちに引き込んで悲嘆にくれるというような、負の思想ではなく、それを二度と繰り返すことがないようにとのための、貴重な反省の感謝すべき絶好の警告材料、つまり“天からの手紙”ととらえ、世間レベルでは負の財産とはいえ、それを貴重な前例として、未来のための前向きの財産とするべきだというのだ。

さらにもう一つ大事なことは、それは「“存在”に対する肯定的性格」を指しているのであって、ブレイクの指摘ももちろん、まさに存在という現在形の時制が使われていることだ。ここで大切なことは、今対象となっている問題は現在においてこれはすでに起こされたものか、あるいは起こされてきてしまったことである。まだ、または将来において起こってもいないことをさえもブレイクは認めているのではない。これは未来までも含んだまま容認されるものではないということだ。そこまで先を考えてしまうということは、起こってしまったことを、くよくよと“先案じ”してしまう事になる。

ここから先の道程はブレイクの考え方に沿って筆者の思索してきた東洋的な哲学領域につながることになるが、要は現在の問題を再び「未来」に繰り返してしまわないようにするために、これから何がいつ起こるかわからない事柄さえ、仮りに前以て認めてしまうというのであれば、それは無責任にも、悪事を容認するどころか、文字通りそれを前以て進んで認めることになる。これはブレイクの世界でも許されないだろう。

ここで細心の注意をしておくべきことは、事実、この“存在”の存在を読み飛ばした明治の識者たちがいかに多かったかということである。つまり、すでにしでかしてしまった

悪事の現実の存在をさえ認めないとすれば、悪を二重に認めるということになってしまうのは当然のことだと言いたいのだ。

このように考えると、ブレイクの思想は一つ読み誤ると、とてつもない危険な思想を生み出す要因にもなることは、誰でも薄々とは理解しているだろう。それは悪人の必要性をも認めるどころか、世界のすべての悪の存在をも認めることになってしまうのだから。ブレイクは、失敗を繰り返さないための防御として、善ないしは悪も、というより悪の存在をこそ天の理として認めたのではないかと考える。ただし「心ひとつが我がの理」「思い通りにならないが心通りになる」ということは心にとめる必要がある。

（4）対立から共生、そして創造へ

中見は、柳の多種多様な問題意識、思想と行動が全体として持つ意義を、特に国際関係の観点から明らかにした。その特徴は、「異質な価値をもつものを効率や力の強弱にとらわれずにそれぞれ重んじ、そこから一層創造的なものを生み出そうと努めてきた（中見 p.4）」という。

Ⅴ. 直観とはなにか

1．直感と直観

直観とは何かを知りたければ、柳が収集した民藝品を直接手に取ってみることと、柳の著作や資料の数々を熟読することだろう。しかし民藝について語るとき、前述のように「直観」という用語の解釈の仕方が非常に難しく、かつ最も重要な位置を占める。だからこの意味の解釈の仕様によっては、柳宗悦自身の学問的基盤はいうに及ばず、やもすれば彼についてのさまざまな面からの評価にさえ、何らかの影響を及ぼさないという保証はない。柳の民藝に関する研究は、近年ますます広く深く厳しくなっているからである。

さて、「直観」を述べる前に、岩波『広辞苑（第5版）1998』によると、一般に同音異義の「直感」というのは、「説明や証明を経ないで、物事の真相を心で直ちに感じ知ること」を指すが、「直観」という用語は「一般に判断、推理などの思惟作用の結果でなく、精神が対象を直接に知的に把握する作用」だという。まず柳の残した著書『民藝とは何か』（柳 2006）から読み解くことにする。

柳は著書のなかで、「（三）…直観の前には上下の差別はありません。それが何物であろうとも、美しいものは美しく、醜い物は醜いのです。今直観の鏡の前にすべてのものを素裸にして示すとき、私はいかに貴族的なものに美しいものが少く、かえって民器に美しいものが多いかを見誤ることができません（柳 2006 p.30）。」という。ここでは直観という

ことばが二度続いて現れるが、ここの表現が非常に大事なだけに、なぜ「直感」ではなく「直観」であらねばならないのかが、筆者のような門外漢にとっては正直、明瞭に理解ができない。それなら筆者のような読者のために、直感でなく直観でなくてはならないことを、なぜ二項対立の概念を使って表現してくれなかったのか。ブレイクの、共立して意義があるという広い境地に立てば、柳が直感より直観こそが大切だと強調することまでは理解できる。

次に柳は次の様な問答を提示する。「なぜ特別な品物よりかえって普通の品物にかくも豊かな美が現れてくるか。それは一つに作る折の心の状態の差違によると云わねばなりません。前者の有想よりも後者の夢想が、より清い境地にあるからです。意識よりも無心が、さらに深いものを含むからです。在銘よりも無垢の方が、より安らかな境地にあるからです。作為よりも必然が、一層厚く美を保証するからです（柳 p.30）。」。

こうして二項対立（詳細は後述する）の表現がつづく。さらに「…人知に守られる富貴な品より、自然に守られる民藝品の方に、より確かさがあることに何の不思議もないわけです。華美よりも質素が、…錯雑さよりも単純なものの方が、…華かさより渋さの方がさらに深い美となってきます（柳 p.31）。」と。つまり、「自然に守られる」とは素朴な作り手と観察者に守られる民藝品を指す。それはことばにも当てはまるだろう。

芸術と言語とはよく比較対照される。両者は用のためにあるが、前者には美がその中心であり、後者は主にコミュニケーションのためにあることは明らかだ。本章ではまず柳が人生の中で手に取った民藝品の諸作品の鑑賞の挙句に到達した、銘品といわれる作品の選定基準であろう、心眼ともいえる「直観」について考えることにする。柳のさらに直観を説く文をここに引用して筆者なりに解説し、納得できる点と疑問点をも記しておきたい。

「若し私の見方に何か本質的な基礎があり得るなら、それは直観より発したといふこと以外あり得ない筈である。かくいふと、宛ら主観に堕してゐる如く評されるかも知れぬが、直観には『私の直観』とゐふやうな性質はない。見方に『私』が出ないからこそ、ものをぢかに観得るのである。直観は『私なき直観』である（柳 1927『工藝の道』緒言 p.8）。」

とはいえ柳自身も筆者の直感と直観の定義からすると、もとは少なくとも「私の直感」を経験してきたことであろう。では「直感」は私の直感ということか。また、個性をどう見るか？そこには矛盾がないだろうか。

柳は続ける。「私を挿む余暇なき直観である。私は私の立論をかかる基礎の上に置かねばならぬ。否、幸か不幸か私は直観以外に見方の持ち合わせがないのである。私は工芸に関する私の思想を歴史学や経済学や化学によって構成してきたのではない。私は知るよりも先に観たのである。このことが私をしてこの工藝論を可能ならしめてゐるのである。そして確信を持って語ることを許してゐるのである（柳 1927『工藝の道』緒言 pp.8-9）。」

ここで柳自身は、単に柳個人としての見識眼の持ち主としてではなく、すでにこの段階で「直感」を越えた「直観」の持ち主であることをここで宣言しており、それが正確かどうかを確認するには他者が入る余地がないだろうと思わせるほどに圧倒される表現である。

続いて柳は「普通直観といふと独断といふ風にとる人がいるが、却って直観なき理論こそ独断と呼んでよいであらう。先にも云ったやうに直観に私見はない。一個の主観に立つなら既に直観ではない（柳 1927『工藝の道』緒言 p.9）。」。さらに「立場なき立場に入る場合ほど、独断から解放される場合はない。」と。窮鼠猫を食むの境地をも潜り抜けた完璧な自由か、これがブレイクの究極の理解なのだろう。さらに、「『不』に入るのは『有』に滞るところがないからである。そこは全く無仮定な世界である。かかる意味で直観より更に確実な客観はない（柳 1927『工藝の道』緒言 p.9）。」という。

これに対して筆者のような浅学にして美術の知見がない者にとっては、（だからこそ、という表現が許されるのであれば、）我々の知らないよほどの事情があるにせよ、柳ほどの人がなぜ「柳の直観」といわないのか、というのが筆者の素直な疑問であった。

ここではもはや自身が人間としての存在ではない。そこで次のような仮説を立てた。「直感」の‘感’が‘感想’などのように狭義の感覚を意味し、人間の個人的で短期的な感情を主に含むのではないかと思われる。

さて「直観」の‘観’とは‘世界観’、‘景観’、‘鳥観図’などに使われるように、個人という段階を越えて、むしろ脱個人的、もはや非個人で、柳の眼識はあまねく宇宙的な広義の意味でさらに長期的、永遠の何かを所有しているのではないかと考えた。

さらに前述では柳は「直観に私見はない」と断定している。しかしそれは柳がここであえて「直観」を強調すべく「私見はない」としたのではないだろうか。つまり、柳はここでは「私見」の代わりに「直感」ということばを使うことは、読者に混乱を招くだろうと、あえて避けたのではないだろうか。

柳の直観ということばのなかには、実は個人としての直感が含まれたあまねく宇宙観を思わせる何か、があるのは事実ではないのか。柳が本当に表現したかったのは、いや、表現すべきだったのは「直感を越えた直観」ではなかったか。それなら筆者にも少しはわかる。

というのは、直感と直観は似ておりながら実際には二項対立に見えるが、実は、柳さえ、彼の冴えた見識眼、つまり「直観」は「私見」や「直感」の域を脱し、それを越えた究極の「直感」、それを彼は客観的な意味での「直観」と呼んだのではないか。ゆえに「直観は客観」であるべきと断言する。「直観」をこのように見ると筆者には、単なる凡人の世界を脱して、直感的あるいは直観“的”に見たような芸術の世界からも脱したすがすがしい柳の姿が、観念的ではあるが、見えてくる。それはすべてを呑み込むブレイクの影響かもしれない。

次に柳は「何故私たちに民藝の美が認識されるに至ったか。なぜ民器が私の心を強く引くか。私は短く「美しいから」とそう答えるよりほかないでしょう。「なぜ美しいのか」と反問される方もあるでしょうが、すべて美への認識は直観のことであって、「なぜ」という知的反省から美が認識されるのではないのです。その問いは何故恋人を恋するかという問いの愚かなのと同じなのです。…直観においては観ることは思うことよりも先なのです（柳 pp.48-9）。」このようなたとえだと、無礼ながら、直観の判定基準は「蓼食う虫も好きづき」ともいえなくはない。

２．柳から学ぶこと

柳の見識眼が「直観」の域にあるかどうかについては、幸運なことに、私たちはその証拠を柳の亡きあと 100 年が過ぎた今も見ることができる。彼は生前、すでに民藝館という形でそして未来の人々に現代、未来にわたって「直観の証拠」として示してくれている。柳は驚くべき徹底した責任感あふれた人生観の持ち主で今も生き続けている。問題はそれらを観るためには、少なくとも柳と同じくらいに努力し、彼と同じくらいの直観の見識眼を持ち得た人は、それらが銘器だとすぐに判断できるはずである。

以上のように柳の書物にある限りでは、筆者はほとんどの柳の提唱を肯定的に受け留めてきた。だが、筆者の第一印象はそれとして重く対峙したい一方、出川が抱いてきた柳批判の出所を検証しておく必要がある。出川は柳が民藝をさらに高度な観点から観ようとする努力を認める一方、高度な評価を与えすぎてきた近来の工芸品や外国の美術品に対する単なる羨望的な称賛を戒め、冷静に鑑賞することを提唱したと見ることもできるからである。

柳の直観論に対して「結局、直観は客観ではない。柳の直観は他者の直観ではない（出川 p.122）。」という出川の批判については、尤もと思える部分が多い。しかし、観点を変えれば、出川も何度も述べているように、工芸に対する従来の日本人一般の観点は、芸術以前の評価であったことは確かである。「ニホン英語」についても、「英米英語」を真似るのは敗戦直後の一時期のものであれば理解できるが、今日まで引きずり、さらにそれを強化さえしようとするところに問題がある。民藝学の場合、その観点を一挙に引き上げ、改革したのは柳の力量であった。

両者を天秤にかけるにはあまりにも畏れ多いが、多くの柳研究者たちが今まで柳の発見に対して素直に感動してきたことは、あながち筋違いではないと筆者は考える。両者を比較するなど重々畏れ多いことではあるが、長い目で見れば「ニホン」英語の観点も、柳の少々独断的な観点と似ていることを認め、ネイティブ英語信奉者たちと共立することこそ、今後の英語教育の発展のためには、より深い理解が得られるものと考える。

３．用と美

純粋な芸術としての用の本源が「鑑賞のための美」とするなら、民藝は単に鑑賞だけのためのものだけでなく用が重視されるように、ことばの本源も、芸術としての美の鑑賞もさることながら、最も重要なことは「理解し合う」という用の面であろう。ことばは一般に理解されなければ用にならない。日本ではごく最近まで、一万名近くの大学の英語教員のうち、大雑把ではあるが、英米文学鑑賞を専門にする英文学者がほぼ９割を、残る１割は英文法学者が占めており、用のためという言語観は薄い。

ことばにしても民藝にしても、所詮は人間が使うものである。それが形式や美、などに縛られて用をなさないのでは意味がない。民藝も単なる芸術品として床の間に飾って鑑賞するという用があるが、それだけでは用をなさないのと同じように、ことばも互いに伝わってこそ意味がある。

出川（出川 p.56）によると柳は工藝は用途に発する（１）という。これに対して出川は「しかし「工芸は用途に発する」とする命題は永遠に正しいのだろうか。工芸の発生源として「用途」が独立して存在していたのだろうか。用途は「人間の用途」ではないだろうか。だとしたら工芸の発するところを遡れば人間に行き着くのではないか。工芸は「用途」が創り出したものというより、「人間」が創り出したもの（２）と把えるべきではないだろうか。工藝は美への憧れを、物への愛を持つ人間がその発生の源である。その「用」も「美」もともに人間から出ている。「工藝は人間に発する」（３）のである。原始の土器に刻文がつけられ、布が染められたのは「用途」がつくったのではなく人間がつくったからである。絶えることなく陶磁に絵がつけられ布地が装飾されその技法が進歩してきたのはそれが「人間の工芸」（４）だからである。（出川 p.56）」という。

言語学的に言えば、日常ことばを使うとき、たいていは人間が主語となる場合が多い。そうであれば、“人間に発し、究極にはその用途に命を繋ぐ”といえばどうだろうか。筆者はこう捉えた。出川がいう「人間」をわざわざはさむことは、ここではすこし考えすぎてはいないか。柳はすでに「用途」という語のなかに、工芸というのは日常生活の中で「人間」が使用するものだと当然想定したうえで説明していただろう。そうだとすれば、以上の下線（１）の宗悦のいう「もともと工藝は用途に発する」という表現の真意は、出川のいうようにあえて「人間」を入れるなら、“工藝は人間の（ための）用途に発する”というべきであっただろう 。

次に出川のいう下線（２）の句も“工芸は「用途」が創り出したものではあるが、その源は「人間」が創り出したもの”とし、そうすれば、出川の下線（３）の「工芸は人間に発する」は“工藝は人間とその用に発する”と言い換えるとどうだろう。最後の下線（４）の「人間の工芸」は（いっそ「美」も加えて、）“人間の工藝、人間の用（と美）のための

工藝”とすれば出川の「人間」という言葉がなおさらのように生かされるのではなかろうか。

さらに出川は「工芸における用途と美は峻別しなければならない。別次元の要素である。用は客観的であり美は主観的である。またすぐれて美しいものは機能を高めるということはなくまた機能が高いものは美的にも高いものではない。倫理と美との関係と同じく用途の美も相関関係はない。この二つの要素はいわば物体の形と色の関係である。…美への欲求は人間の本性である（出川 p.57）。」という。

ここで筆者が想い起こすのはロシアの小説家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ（1948-）著の『戦争に女性は似合わない』の小話「銃と花」である。ロシアの女性兵士が一日の銃撃訓練を終えての帰途、道端で見つけた一輪の花、それを兵舎に持ち帰り、何気なく銃口に一本さしていたのを上官が見て、とがめたという話である。これは過酷な戦争状態のなかにも、女性の心理をくみ取る…男と違って戦火の中でも女性というのは緊張のなかにもほんのひと時を持てるのであろう。

Ⅵ．西洋の模倣からの脱却

１．模倣から統一へ

本章はそのタイトルが示すように柳が西洋の模倣からどのように脱却し独自の柳理論に行き着いたかについて述べたい。実はこの章は筆者にとって最も熱を入れて描きたいところである。幸にも素晴らしい研究書を手に入れたので、それに沿って紹介することにする。柳研究者たちの中でもひときわ豊富で綿密な研究学者の一人として知られる中見真理によると、1921-2 年には日本の国宝のほとんどが中国や朝鮮のもの、もしくはその模倣であることを柳は再発見し、これによって今後の日本の在り方は模倣の域を脱却し、自立性を追求する必要があることを説いた（中見 p.211, p.217）と。

さらに中見によると、柳は、直観的に「日本文化が近代西洋文明を単に模倣することには強い抵抗を持っていた（下線筆者）」ようで、古代日本の美は、中国や朝鮮の美の模倣であったから、日本市場に中国や朝鮮の美に匹敵するものを見つけるためには、古代以外の時代にそれを期待するしかなかったが、必要な場合は追求して「消化」し、独自のものにするならば、それはもはや模倣ではない（中見 pp.111-6 下線筆者）という。

その好例が、中見によると、柳は外国好みの洋画家が、外国の農民美術から美しいと思うものを選んで、日本の田舎の青年たちに模作させ、純日本・純農民のものが殆ど見当たらないとみなし、そこで柳は工芸の美は地方色に活き、最初から国際性をねらったものは結局どの国のものにもならず、むしろ国民的なものこそがどこの国のものとも並在し調和する国際性をもっている（中見 p.152）と啓発したという。

さて、日本に生まれ育ち、数百年をかけて今やっと蕾を見せかけたかに見える「ニホン英語」にその存在意義があるとすれば、明らかに柳のコメントに合致する。ましてや民藝運動でも柳と共に活躍した精神科医式場隆三郎（中見 p.157, 末延 2022 p.111）と同じように、すでに英米人のネイティブ英語の単なる模倣の危険性をも、柳はこの時代にすでにそれとなく警告していたものと理解できる。それに対して筆者は、日本の言語学研究はそのほとんどの部分が欧米の模倣であって、その域を出るものではないと捉えてきた。

また、中見によると、1955 年、柳は世界を一色にする事によって平和が来るのではなく、人は同質美にかこまれる現場には、心の安住の地を見出すことはできないと予見していたという（中見 p.208）。

さらに中見によると第二次世界大戦後の日本では、日本文化の独自性を強調する文化的差異化志向はむしろ「乗り越えるべき危険な対象」とされ、歴史学者喜田貞吉は朝鮮との「同化政策」こそが差別解消につながるはずだと考えていた（以上中見 p.116, p.119, p.127）という。これに対して柳は、対立から創造、つまり、仏教とキリスト教、日本と朝鮮、ヤマトと沖縄、民藝運動のなかでの個人作家と工人の関係、労働者と知識層、都市と農村、人間と機械、このような対立にどう向かうかが彼の生涯の課題であった（中見 p.4）という。

こうした柳の思想の背景には、このような暴力で虐げられる近隣国の文化の中に、感傷的ではあるとはいえ、そこに美を求め、その歴史的存在を宗教的信念を以て、深く尊敬のまなざしを注ぎつつ、理解していた。

２．沖縄民や朝鮮民族に対する言語政策

（１）朝鮮民族に対して行った植民地政策

柳は日本が当時朝鮮民族に対して行った植民地政策（末延 2017 pp.88-105）を強く批判し、さらに沖縄に対して政府が行った方言廃止政策を批判した。日本政府は 1940 年、沖縄行政府を通じて、沖縄の人々を相手に、本土の人々が使う標準的な日本語に合わせた日本語を使わせようと、日本語の「標準語普及施策」を実施した。その手始めとして、

イ．沖縄弁を使う生徒・学生達に学校生活を通じて標準語を習得させること。

ロ．そこから家庭、職場と沖縄方言を消滅させ、

ハ．最終的には全沖縄住民の日本語を本土の標準語に改めさせる。

これに柳は沖縄の素朴な方言を撲滅させてまで標準語一辺倒にするのは、間違っていると唱えた。というのは、沖縄は文化的には決して本土の府県に劣るというより、むしろ優秀で高度な文化を持つことを忘れてはならないと提唱した。中でもその貴重な文化こそ本土の人々が使う日本語の標準語ではなく、まさに沖縄方言が土台となっていることを強調したのである（出川 p.81 より）。

言語学、中でも外国語教育を専門としてきた者の一人として柳の考え方を顧みれば、この時代に沖縄方言の美しさを改めて「発見」し、認めたことは評価したい。この後しばらくは標準語としての日本語の啓蒙運動が全国的に広まったものの、本土でさえ猛反対を受けて失速した。かつて日本語の歴史の上で、日本語を英語にと提唱した文部大臣森有礼（末延 2015 p.35）のことを考えれば、柳の功績は大きい。アイヌについてその文化を高く評価し、彼らの製作する工芸の美しさを再発見したのも、やはり柳であった。

以上のような活動について、柳の思想の背景には、日本軍によって暴力で虐げられる近隣国の文化の中に、感傷もあるとはいえ、そこにむしろ美を求め、宗教的信念を以て、その歴史的存在を深く尊敬のまなざしをもって注ぎつつ、理解していたことがわかる。

日本が日清・日露戦争を次々と経験してゆく中で、アジアに先んじて自国日本が世界の中で、当時の思想家の多くには、世界とは言わないまでも、せめてアジアの中では抜きん出ていて、優秀な国だという意識があったことは明らかであろう。しかし実際はその裏で日本人の間では、西洋に対する劣等意識があっただろう。それが今も亡霊のように続いているのではないか。

こうした東洋と西洋のはざまで、西洋に追いつき追い越せというなかで、これからの日本の識者たちがまず第一にすべきことは何であったか。当時中学生であった柳は、そのことが幸いしてか、大人たちの間で優劣を競うといった思想的偏りを抱く前に、両者の優れた面を取り入れ、「共生」する道を選んだ。

しかし共生は大切だが、「ニホン英語」の場合、日本人が英米の英語を完璧に近いほどに真似るという条件は3～4歳にもなれば永久に不可能であり、第一その必要性がない。「ニホン英語」には「英米英語」は勿論、英米文化のみならず、日本語、日本文化の個性が詰まっているからだ。平等にといって、実際に互いの言語を完璧に学び合うことはさらに不可能であるだけでなくその必要性もない。シーソーの様に、お互いにバランスをとって前へ寄るしかない。強制では共生はできない。

３．統一から差異化・独自性へ

（１）岡倉天心と柳宗悦

中見によると、「柳には東洋人の統一や同類を期待するというより、むしろ「差異化」「独自性」を志向していた（中見 p.133 より）」という。たとえば岡倉天心（1862-1913）と柳は当時ともに日本で一流の芸術家であったが、天心は英語の普及にも努めてきた人物で、中見によると民族の内発性に期待していた（『天心全集』1 p.163 より）ようである。天心は、本来東洋には同じ社会的理想、…同じ経済機構…同じ抱負と偏見…生活に底流する統一性、…東洋人は直ちに東洋人と通じ合うはずだという期待があった（中見 p.133 より）。

しかし、柳には真に自己を反省しようとするならば、まず自己を離れなければならならず、西洋の美を真に知る者が、同時に東洋の美も真に知ることができる人（中見 p.98）なのだとする考え方があった。同等に互いに西洋東洋の区別なく互いの文化を学び親しむということは、東洋思想を卑下したり、逆に西洋思想にあこがれるというような、反逆・逆襲というような二者択一的な思想より、ブレイクのいう共生、つまり、自己反省のためにも他国を学ぶということは実に重要な平和への過程なのであった。

ことばでいうなら、他の言語、それに言語観を知って、自己のそれを上乗せして吟味するために、現代言語学を見直すことで、より一層「ニホン英語」の存在を吟味することが可能である。この考え方はブレイクの「相互依存」とともに、東洋では天の理の「二つ一つ」の理からくる考え方である。喩えていえば、剣同士で戦えばどちらか或いは両者が傷つくが、剣と砥石の対であれば、互いが学び・教えるという、相手を思い合って接することで、互いの役目を成就する。こうして柳は模倣からの脱却から独自性の探求、そして最後に日本人のプライドとしての民藝を発見するに至る（中見 p.157, p.208, p.217, pp.265-7）のである。

（2）「ニホン英語」の現状

思い返せば 80 年間近くも続いた韓国、台湾（末延 2017）や、沖縄、アイヌといった地域での過去の言語差別と全く同じレベルの差別が、日本人学生たちが現実に教育の現場で経験していること自体が驚嘆に値するというのに、21 世紀に入っても未だに解決されていない。それが義務教育のなかで最も重要な科目の一つとして存在する日本の英語教育政策の現状である。

「ニホン英語」は日本人の民衆の手で生まれた伝統的な言語であるから、これは民藝としての方言、「ニホン英語」と呼んでもいいかもしれない。ところが、言語を専門とする日本の言語学者、英語教師たちによっていまだに間違いとして排除されるべきものとされる運命にある。こうした考え方は言語学、教育学的にも間違った考え方であることはすでに述べてきた。この間違いのもとは欧米を中心とする現代言語学の理論からくるものであり、彼らの主張したいことは、言語は文化をその起源、基盤として生まれたものであるから、英語を学ぶ場合、まず英米文化を尊重しなければならない、つまり言語を学ぶ際にはその言語の生まれた国の文化を学ばねばならない（末延 2020 pp.103-11）と、もっともらしい考え方である。

ところが社会言語学の観点からすれば、ことばは人間社会の環境、そこで自分たちが地域で育てた独特の文化の中で生まれ、その社会が育ててゆくものであるから、国家が学生・生徒たちにある特定の異文化英語をそっくり真似るよう強要するようなことは、言語学的

にまず不自然（末延 2020 pp.111-27）である。英米で生まれた「英米英語」であろうとも、日本人がそれを学び、使う場合には、そこには日本の言語である日本語と日本文化が介入するのは必然だから、これから学習者が学ぼうとする純粋な「英米英語」は、否も応もなく日本語の母語から影響を受けることはまったく自然なことだから、当然日本語の影響を受けた英語が学ばれ、その結果「ニホン英語」ができあがることになる。世界各国でも同じ現象が起きており、それぞれ「中国英語」、「ドイツ英語」などと呼ばれ、忌み嫌うどころか、それぞれの‘お国自慢の英語’として使われている。そのことに異常を感じる国は、筆者の知る限りでは日本を除いてほぼ見られない。

（3）標準英米文法の世界対異種英語の「ニホン英語」

こうしてできた「ニホン英語」や「アフリカ英語」などは便宜上、異種英語とよばれ、世界には「英米英語」とともに 60 以上が存在する。「ニホン英語」もその仲間である。

問題は日本ではネイティブ英語である「英米英語」のみが正しいという論である。こんな理論は偏見であり、全くいかなる理論も支えにならないことは言語学者たち自身が最も知るべきところである。証拠のない偏向したものである。にも拘わらず、基本的に守られるべき個人のことばが排除され、異文化の中で育った「英米英語」を学問、学習という名のもとに、学習者に対して厳しく採点したり減点することは、指導者といえども断じて許されることではない。

「ニホン英語」も含め、ほぼ生まれついて持っているといっていいほどの個人の方言を制限し、個人の慣性や感性にまで侵入することはもちろん、制限したり、禁止する自由も権利もあってはならない。このようなことで学習者の神経を消耗させることを当然とする権利は、誰にもない。世の中のあらゆる人々も、言語も芸術と同じく、区別はあっても差別はあってはならない。言語学上共通の真理として「すべての言語は平等」といわれるゆえんである。

（4）ことばの「理解率」

さて、言語における分野では、ことばは芸術である前に互いに理解できるかどうかが命であるから、互いの言語を差別してはならないが、それぞれの区別は当然あり、その一つが「理解率」という規準である。その点でことばは「コミュニケーション率（伝達率）（末延 1991）」、「理解率」（末延 2022）」が最優先するのは論を待たない。しかし意味よりも形式の方を大切にしがちな現代言語学という学問がこの半世紀、横行してきた（末延 2020 pp.102-11）。自然に生まれた言語をわざわざ科学化しようと形式にこだわり、その結果当然ながら用より形式を尊重せざるを得なくなった現代言語学の傾向は、人間の役に立たな

い面が多く見られる。それはそれぞれの言語学者の言語観からにじみ出るものだ（末延2020）。

「ニホン英語」の成立の歴史の過程とそこにまつわる環境との関係、つまり学習目標言語としての「英米英語」と、母語としての「日本語」の構造を紐解き、その理解率等を実証することで互いの価値を見出し、それを世界に啓蒙したり、また必要に応じて互いの異種英語の特徴をも共有し合うことは人間同士のごく自然な言語活動である。一方、民藝美については柳の直観によるもの、それに対する批判も謙虚に参考にしながら、そこに客観性を求めるには今後研究の余地が残されている。両者に共通することは、自国の文化・歴史を忘れて外国賛美の風潮中心の教育に偏向せず、ともに共立しようと心掛けることであろう。

「ニホン英語」において客観的に判断できる理解度について、ハワイ大学のラリー・スミス教授の実験研究では、世界7か国の人々の「アメリカ英語」の理解率が55％に対して、「ニホン英語」が78％と群を抜いていることが分かった（Smith,L.E.,et Bisazza, J.A. 1982, 末延1986, 2002他）。

これは柳が進言しているように、たとえば他国文化との競争精神の問題など、数々は「ニホン英語」の発展に対しても多くの謙虚に学ぶべきところがあることと、さらなる両者の研究の必要性がある。たとえば筆者が1988年に行った実験研究の結果では、成人アメリカ人による日本人大学生の「ニホン英語」の理解率が79.2%となっている。それぞれ実験条件は異なるものの、1999年の結果でも81%、2012年では94.7%（末延2012 p.16）となっている。一方、日本の公立大学生がアメリカ人の英語（1分間のニュース）を最初に一回聴いた時の理解率は10.23%だったが、二度目に聴いた時には18.94%、3回目は27.09%、4回目は33.69%に積み上がり、そしてdictation（書き取り）をさせたところ、一挙に59.55%の理解率となった（Suenobu1986）。

これは、アメリカ人のアナウンサーがほんの1-2秒ゆっくり喋ってくれていれば、ほとんど一回である程度まで理解できていたと思えるほどの理解率であった。この数字が示していることは、まさにネイティブ相手の聞き手を主な対象としたネイティブ英語のスピードの問題であったといえる。日本人の英語発話においても、心理面でエラーを怖れさせるような環境の下での研究結果（Suenobu 1995）では、当然ながら発話率は制限された。日本の英語教師の多くに見られる一見善意で厳しい「英米英語」のルールをお仕着せてしまう現象は、実は善意というより偽善といわざるを得ないのだ。とはいえ、共生という立場でいえば悪気あってのお仕着せではないことも理解し、まじめな学習者たちの無心の努力が決して損なわれることのないよう、一日も早く啓蒙しなければならない。

このように日本人の使う「ニホン英語」は、実質的には世界でトップ･レベルの伝達率、

理解率を持つ英語であることが明らかであるにもかかわらず、日本の英語教育では、基本的には伝達率が最下位に近い「英米英語」以外を認めない。一方英語のクラスでは生徒たちは「『ニホン英語』は決して通じない」、と言い聞かされており、自分の「ニホン英語」を恥の様に信じさせるマインド・コントロール教育が長い間なされてきた。それなら、通じる度合いの最も低い「英米英語」をわざわざ学ばせてやる気を失わせ、伝達率を下げさせるのはなぜか。その前に、なぜ「ニホン英語」は伝達率が高いのか。それなのにどうして「英米英語」がいいのか。

理由は簡単である。ニホン英語は「母音英語」といわれるように、発音も丁寧（Suenobu 1992）で、母語である日本語は主に学習段階に応じて3種類もの文字を持ち、学習もそれによって年齢に合わせて文字数も膨らんでゆく。世界のあらゆる言語のうち、音韻や文構造の中身の多くは50世紀以上も前の言語の黎明期以来、生き物としてのコミュニケーションのために、口から出る音声は最も効果的な母音が中心に、そして統語面ではほとんどの主語が人間になっているため、語順も人間が文頭にきており、このように世界の人々は当然にして、それぞれの環境、伝統的な文化社会の中で育った言語を用いている（末延 2013 p.27）。

一方、世界でもレベルが最も高いはずの「英米英語」は、ほぼ最下位である。筆者が「英米英語」を「子音英語」（末延 2015 pp.145-56）と解釈してきたように、時間的、経済的な効率性のために、母音を削除して子音を強調することで生活レベルを高めるといった発話法をとっているからだ。自国人同士の会話であれば、相手かまわず難しい語彙やスラングを使って、早口でしゃべるのは一向にかまわないが、非英米語圏の人たちに対しても同じ態度を取るのは人間同士、互いに不利益である。（末延 2015 pp.145-56）。彼らの多くは外国語の学習経験が少ないばかりに、相手の気持ちが理解しにくいのだろう（藤本 .pp.146-7）。ここから言えることは、日本人がそのような相手と話しが通じるようにするには、まず自分が丁寧にわかりやすく話すしかない。この考えが、伝達率を自然と上げてきたと見るのも互いの共生の道だろうか。

さて「英米英語」は以上のようなデメリットを持ちながらも、その便利さから世界中の非英米圏の人たち同士で最もよく話され、交わることができる最も便利な言語のひとつである。その理由は、たとえば中国語が分からない日本人でも、異種英語と揶揄されながらも、英語が互いの共通言語であればコミュニケーションができるからだ。互いに西洋文化がプンプン香る上手な「英米英語」でなくても、世界中の人たちとある程度までは交流できる。これは大きなメリットである。その意味で「英米英語」の短所を克服して、話相手にとってわかりやすい英語、つまり私たちの先祖が日本人らしい「丁寧さと親切さ」を武器にした高い伝達率、理解率をと‘頑張ってきた’のが実は「ニホン英語」なのである。

Ⅶ. 展望

1.「英米英語」と「ニホン英語」との共生

さて、柳の主張する「民藝」評価の根底をなす難解な「直観」の理解について、出川の衣を着せない厳しい批評が加わったことが、柳と出川の対峙と観るのではなく、別の角度から「民藝（学）」を評価することによってこそ、初めて柳宗悦の「民藝」の全体像をさらに広く深く観るためのカギが見え始めてくるだろう。そうした面では「ニホン英語」がぐつぐつと他力本願の大自然のふところに抱かれて醸造されながら、さらに日本人本来の香りとうま味を引き出すべく期待しながら、こつこつとまじめに励んできた日本の若者たちの姿が、工人の素朴さに勝るとも劣らない見事な作品となって相乗的に、二重映りになってくる。

大人の価値観として持つ「英米英語」への傾きに対して、彼等が適切にブレーキをかけながら、将来日本文化をもとにした真の「ニホン英語」への大いなる共生が交わされる中に、「ニホン英語」の姿を世界に実現させたいものである。こう考えてゆくと、忌み嫌われながらも耐え抜いてできた「ニホン英語」の伝達力も、そんな境遇の中で揉まれてきたからこその賜物だと解釈できる。

そこで、柳の定義した「民藝」という名称は、主に器物としての物質に名付けられてきたが、一方、世界各国の母語をはじめ、非標準語としての何百、何千といわれる方言（現在これらは民藝として認められている。）の一つ一つ、そしてそれに加えて、日本で醸造されてきた英米のブレンドとしての「ニホン英語」も、それぞれの地域の特徴を秘めた、いわば民藝品のような無形の民藝として実在すると考えられなくもない。私たちの祖先と現代の若い‘工人（英語学習者）’たちが、そのような過酷な環境のなかで育み、高い伝達率、理解率を維持し世界へ向けての銘品として発展させてきた「ニホン英語」が、古くは陶器工人たちが恵まれない環境のなかで苦労し、その地位を築いてきたことと共通性があると考えられないだろうか。しかし今の日本の教育制度ではそれらの多くの異種英語としての英語方言は、既成の教育枠からはみ出すことを避けるため、中でも、今さら日本文化をプンプンとにじませる「ニホン英語」は正式には認められないのだろう。とはいえ、我々の祖先が長きにわたって醸造し続けてきたというその実績は、民藝の抽象的なひとつとして位置づけられないだろうか。

本稿を閉じるにあたって、柳の次のことばを引用したい。まず最初に柳は「…初代の茶人達にどうして美へのよい認識があったか。もとより彼等に鋭い直観があったことが、それを可能ならしめた基礎であるのは云うまでもないのです。ですが同時に直観を充分に働かし得るような境地にいたからと説くこともできるのです。…ちょうど吾々の浮世絵が、

異常な注意を欧州で起こしたのと同じなのです。…だが時代が過ぎてその新鮮さが薄らぐ時、…認識は直観の基礎を失い、概念が代わってその位置を占めたからです。見方は型を出でず、美は形式化されてきました。…（柳 p.49）」

ことばの場合はどうだろうか。私たち日本人の祖先は100年にわたって現在の「ニホン英語」を打ち立てた。柳のこの本文では浮世絵の話が出てくるが、これはフランスで起こったジャポニズムのブームで、日本から送る貴重な陶器が割れないようにするために包んだ包装紙に過ぎなかった。ところがこの浮世絵の存在に端を発して、数々の日本の芸術、美術が世界に拡がったことはよく知られている。このことを思うと、くどいようだが、「ニホン英語」は今も正式な「英米英語」から距離があるからという理由で、見習うべきではない言語として英語教育界では排撃の対象として処理されてきた。しかしその伝達率・理解率は前述のように、世界でも称賛に値する正確さを有している。とはいえ、まずは歴史ある「ネイティブ英語」の包装紙として「ニホン英語」を捉えることから共生をはかるのが健全だろう。

「ニホン英語」の今後も、日常的には相反するように見えるブレイクや十全の守護による「対の共生」の教えをヒントに、それこそがことばという存在が平和への道のために貢献できる大きな道であると考える。その使用にあたっては、私たちそれぞれの「こころひとつが我がもの」だから自由に使うことができるが、代わりにその責任もたえず個々の心の中にあらねばならないだろう。これからも「ニホン英語」は民藝（学）の考え方に沿って、世界の多くの人々に理解されるのではないかという希望を抱いている。日本では「誤った英語」といわれる「ニホン英語」も、世界の六十種以上にわたる異種英語とともに、無形の民藝の一つとして認められる日も来るだろう。「ニホン英語」が言語学の抽象的な面としての柳の「民藝学」の精神の範疇に加わることが許され、将来、同様に言語学における範疇に加わる時代が来ることを期待したい。

様々な評価があるとはいえ、「英米英語」は歴史的に見ても現代の国際社会のみならず人々が結び合うための国際言語の祖の位置にあり、今まで多大な恩恵を受けてきた、大切な言語である。それに対しては誰も異論を持たない。そんな中でその孫、ひ孫にあたる「ニホン英語」も様々な批評を受けてきたが、その伝達率・理解率の高さという特徴をフルに生かして、国際英語の元となったネイティブ英語の更なる発展のためにも、これらの世界の様々な共通語を使って、一人一人が互いを理解し合う争いのない世界、譲り合い助け合いといった利他主義の文化を築きあげ、世界の文化に貢献しながら、願わくば、必要に応じて理解率の高い「ニホン英語」あっての「英米英語」となってゆくことだろう。「ニホン英語」が少しでもこれからの国際社会での用に貢献するために、まずその貴重な言語をさらに洗練するための包装紙とならんことを願って筆を置くことにする。

（謝辞：本稿の完成に当たって、いつもながら数々の資料整理・翻訳・まとめ等の面で、たえず誠意をもって助力して下さった谷口博紀君及び高山晃寿君に、紙面を借りて感謝したい。本論文における引用、思想的観点などすべての文責は末延にある。）

参考文献

アレクシエーヴィチ, S「銃と花」『戦争に女性は似合わない』岩波現代文庫　岩波書店　2016 所収.
出川直樹『民芸―理論の崩壊と様式の誕生―』新潮社　1988.
藤本久司「文化の類型とコミュニケーションギャップ」『人文論叢』第 28 号　三重大学　2011.
伊藤梢「民藝の多重性を『暮らす』―現代の民藝の諸相に関する一考察―」『北陸大学紀要』第 52 号（2022 年 3 月）.
新村出『広辞苑（第 5 版）』岩波書店　1998.
三村京子「天国と地獄の結婚―ウイリアム・ブレイク」 尾久彰三監修『柳宗悦の世界（別冊太陽）』平凡社　2006 所収.
松井健『柳宗悦と民藝の現在』吉川弘文館　2005.
中見真理『柳宗悦』東京大学出版会　2003.
尾久彰三監修『柳宗悦の世界（別冊太陽）』平凡社　2006.
大熊昭信『ウイリアム・ブレイク研究』 彩流社　1997.
熊代壮歩『ウイリアム・ブレイク（Blake, William）その生涯と作品のすべて』北西堂書店　1979.
Smith,L.E. et Bisazza, J.A.,Comprehensibility of Three Varieties of English for Collage Students in Seven Countries. *Language Learning*, 32, 2, pp.259-270., 1982.
Saussure, F.de, *Le Cours de linguistique générale* 1916,『一般言語学講義』小林英夫訳 岩波書店 1972.
末延岑生「ニホン英語」本名信行『アジアの英語』くろしお出版　1991 所収.
――――『ことばの元を探る―知恵と文字の仕込み』神戸商科大学研究叢書 LXXI，神戸商科大学学術研究会　2004，及びグローカル新書 天理大学おやさと研究所　2005.
――――『ニホン英語は世界で通じる』平凡社新書 平凡社　2010.
Suenobu, M., *Errorology in English*. Yugetsu Shobo, 2002.
――――*The Preparation Theory of the Origin of Language*, UH Monograph LXXVI, The Institute of Economic Research, University of Hyogo, Kobe, 2006.
Suenobu, M., *et al*. Listening Comprehension and the Process of Information Acquisition by Non-Native Speakers of English, *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, XXIV/3, Julius Groos Verlag, Heidelberg. West Germany 1986.
――――An Experimental Study of Intelligibility of Japanese English. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 30 (2), Julius Groos Verlag, Heidelberg, 1992.
――――The Relationship between Psychological Pressure and Learners' Utterances. *International Journal of Psycholinguistics* 11 (3), International Society of Applied Psycholinguistics, 1995.
――――Information Transmission of English by Japanese Learners of English. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 35 (3), Julius Groos Verlag, Heidelberg, 1997.
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）をデザインする」(1)『芸術工学 2011』神戸芸術工科大学

2011., 及び http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html で検索.
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（2）（形態編）―アジア英語（*Open Asian*）を礎として」『芸術工学 2012』 神戸芸術工科大学 2012. 及び http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（3）―統語編（語順）」『人論集』第 48 巻 兵庫県立大学 2013a, 及び『日本語学論説資料』論説資料保存会第 51 号に転載。及び nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（4）―統語編（時制）」日本「アジア英語」学会 2013b.
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（5）―音声編」『人文論集』 第 49 巻 兵庫県立大学 2014, 及び『英語学論説資料』論説資料保存会 第 48 号「音韻論」の項に転載。また nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（6）―歴史編（イギリス偏向の英語教育―第二次世界大戦前夜まで）」『人文論集』第 50 巻 兵庫県立大学 2015. また nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（7）―従米から屈米への日米外交」『人文論集』 第 51 巻 兵庫県立大学 2016 nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（8）―日本人の言語観・言語教育観（台湾統治時代の日本語普及政策から）」『人文論集』第 52 巻 兵庫県立大学 2017. また nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（9）－‘宿命’の心理学から‘心ひとつが我が理’の心理学へ」『人文論集』第 53 巻 兵庫県立大学 2018, 及び nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（10）－日本の高校生の英語学習観を探る（ソシュールの言語観を礎として）『人文論集』第 54 巻 兵庫県立大学 2019」, 及び nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（11）―宿命の現代言語学から社会言語学へ」『人文論集』第 55 巻 兵庫県立大学 2020., 及び nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「ニホン英語（*Open Japanese*）の類型化研究（12）―ニホン英語の内発的発展に向けて（アメリカ英語同化政策の危機の中で）『人文論集』第 56 巻 兵庫県立大学 2022, 及び nii.ac.jp にて mineo suenobu
――――「日本人の英語―その形態的・統語的特徴」『人文論集』31-1, 神戸商科大学学術研究会 1995.9. 及び『英語学論説資料』第 30 号, 論説資料保会に転載.
天理大学おやさと研究所『天理教事典』 1977.
岡倉天心『天心全集』1 平凡社 1986.
鶴見俊輔『柳宗悦』平凡社 1976.
柳宗悦『民藝とは何か』講談社学術文庫 2006.
――――『柳宗悦全集』第 16 巻 筑摩書房 1981.
――――「工藝の道」『柳宗悦選集』第一巻 1927.（『工藝の道』講談社学術文庫 講談社 2005.）